

ニホンヤモリは古い外来種？



自然・環境評価研究部 系統分類研究グループ

太田 英利

ニホンヤモリ (*Gekko japonicus*; 図左) はシーボルトの標本にもとづき、文字通り「日本の家守 (やもり)」として記載されました。しかし文献学的に日本での在来性に疑問があったため、韓国や中国の研究者とともに古文書学的、分子生物的、生態学的手法により検討しました。ここではそのうち、分子生物学的検討の結果について報告します。

日本国内の各地の集団と、大陸中国や韓国の集団 (図左中) とを比べたところ、ミトコンドリア DNA の塩基配列を指標とした比較 (図右中) から、また核 DNA のマイクロサテライトに基づく解析 (図右) から、地域間で遺伝的分化がほとんどないこと、遺伝的多様性は中国、日本、韓国の順で高いこともわかりました。

一方で文献情報にもとづき、更新世以降の日本や朝鮮半島各地での気温変動などの履歴を推定したところ、現在ニホンヤモリが野外に分布する地理的範囲から推定される生息可能温度条件の下限は、更新世末期の最終氷期での温度条件のもとでの日本では、たとえば火山周辺の地熱のような特別な熱源がなければ、不可能なことがわかりました。

以上や他の結果を併せるとニホンヤモリは日本古来の動物ではなく、おそらく平安時代以降に大陸から人為的に到達した「古い外来種」であることが強く示唆されます。一般に外来種とされるのは、明治時代以降に日本に侵入した種に限られますが、今後こうしたより「古い外来種」の扱いが、保全生物学上の重要課題となるでしょう。

